

## 対比の構造に着目して戦争文学を読む ～戦争文学教材の史的概観と新しい学習指導について～

福田 将太

### 1. はじめに

教科書教材として長きに亘って採用され続けているジャンルの一つに戦争教材がある。戦後から現在まで、国語科教科書に採用された作品数はかなりの数に上る。それならば、作品の数だけそれぞれの作品の特色を生かした授業が展開されていて当然だが、実際には戦争文学教材の授業は、どうもワンパターンになりがちである。筆者が受けてきた戦争文学教材の授業も、ただ本文を何度も詳細に読み、場面の様子を想像する、登場人物の気持ちを考える、作者の伝えたいことを考える、といったものばかりであった。このような学習ばかりを積み重ねても、その教材に関してとても詳しくなったというだけで、他の教材を読むときにも使える普遍的な読む技術は身につけていないのではなかろうか。

そもそも、戦争文学教材は、国語科という一教科の中で、文学教材のものとに成立したものであって、道徳や社会の副教材的なものではない。子ども達に戦争の非人間性や平和の大切さを考えさせることは必要ではあると思うが、それだけでは国語の授業として成立しないだろう。1つ間違えれば、徳目主義的な道徳の授業にも陥りかねない。では、国語の授業で戦争文学教材を扱う意義は、いったい何なのだろうか。

そこで本稿では、教科書教材としての戦争文学教材の史的概観を行うとともに、読みの技術に着目した新しい戦争文学教材の授業について考究していく。

### 2. 小学校国語科教科書における戦争文学教材の史的概観

研究を進めるにあたり、これまで小学校国語科教科書に掲載された戦争

文学教材を全て調査し、史的概観を行った。調査の範囲は、民間の教科書会社が発行するようになった昭和24年度版から、現行の平成14年度版までの小学校国語科教科書とした。また、対象とする教科書会社は光村図書、東京書籍、学校図書、日本書籍、教育出版、大阪書籍の6社とした。(大阪書籍は平成元年度以降、発行を再開したため、昭和49年度から昭和61年度までは5社とした。)以下に一覧表を掲載する。

昭和49年度版

	光村図書	東京書籍	学校図書	日本書籍	教育出版
一 年					
二 年			『かわいそうなぞう』 土屋由岐雄		
三 年					
四 年				『一つの花』 今西祐行	
五 年		『春先のひょう』 杉みき子			
六 年	『最後の授業』 神宮輝夫		『救命艇の少年』 石川光男 『最後の授業』 松田穰		

昭和52年度版

	光村図書	東京書籍	学校図書	日本書籍	教育出版
一 年					
二 年			『かわいそうなぞう』 土屋由岐雄		『かわいそうなぞう』 土屋由岐雄
三					

年					
四 年	『一つの花』 今西祐行		『一番のさくらの木』 来栖良夫	『一つの花』 今西祐行	『一つの花』 今西祐行
五 年		『春先のひょう』 杉みき子	『ノバのナイフ』 西郷竹彦		『お母さんの木』 大川悦生
六 年	『石うすの歌』 壺井栄 『最後の授業』 神宮輝夫	『ヒロシマのうた』 今西祐行	『救命艇の少年』 石川光男 『最後の授業』 松田稔		『最後の授業』 桜田左

昭和 55 年度版

	光村図書	東京書籍	学校図書	日本書籍	教育出版
一 年					
二 年			『かわいそうなぞう』 土屋由岐雄		『かわいそうなぞう』 土屋由岐雄
三 年			『クロマツのきつね』 高橋宏幸	『おこりじぞう』 山口勇子	『母さんの歌』 大野允子
四 年	『一つの花』 今西祐行		『一番のさくらの木』 来栖良夫	『一番のさくらの木』 来栖良夫	『一つの花』 今西祐行
五 年	『空こうかお騎士』 吉田甲子太郎	『春先の表』 杉みき子		『お母さんの木』 大川悦生	『お母さんの木』 大川悦生
六 年	『石うすの歌』 壺井栄 『最後の授業』 神宮輝夫	『ヒロシマのうた』 今西祐行	『救命艇の少年』 石川光男 『最後の授業』 松田稔	『川とノリオ』 いぬいとみこ 『最後の授業』 桜田左	『川とノリオ』 いぬいとみこ

昭和 58 年度版

	光村図書	東京書籍	学校図書	日本書籍	教育出版
一 年					

二 年			『かわいそうなぞう』 土屋由岐雄		『かわいそうなぞう』 土屋由岐雄
三 年			『チロヌツのきつね』 高橋宏幸	『おこりじぞう』 山口勇子	『お母さんの紙ひな』 長崎源之助
四 年	『一つの花』 今西祐行		『すいかの種』 沖井千代子	『一つの花』 今西祐行	『一つの花』 今西祐行
五 年		『春先のひょう』 杉みき子		『お母さんの木』 大川悦生	『お母さんの木』 大川悦生
六 年	『石うすの歌』 壺井栄 『最後の授業』 神宮輝夫	『ヒロシマのうた』 今西祐行	『最後の授業』 松田稔	『川とノリオ』 いぬいとみこ 『最後の授業』 桜田左	『川とノリオ』 いぬいとみこ

昭和 61 年度版

	光村図書	東京書籍	学校図書	日本書籍	教育出版
一 年					
二 年					『そして、トン キーもしんだ』 田辺まもる
三 年	『ちいちゃんのかげ おくり』 あまんきみこ		『チロヌツのきつね』 高橋宏幸	『おこりじぞう』 山口勇子	『お母さんの紙ひな』 長崎源之助
四 年	『一つの花』 今西祐行		『すいかの種』 沖井千代子	『一つの花』 今西祐行	『一つの花』 今西祐行
五 年		『春先のひょう』 杉みき子		『お母さんの木』 大川悦生	『お母さんの木』 大川悦生
六 年	『石うすの歌』 壺井栄	『ヒロシマのうた』 今西祐行	『山へ行く牛』 川村たかし	『川とノリオ』 いぬいとみこ	『川とノリオ』 いぬいとみこ

平成元年度版

	光村図書	東京書籍	学校図書	日本書籍	教育出版	大阪書籍
一 年						
二 年				『えんぴつびな』 長崎源之助	『そして、トンキ ーもしんだ』 田辺まもる	『ごめんねムン』 おまこと
三 年	『ちいちゃんの かがおくり』 あまんきみこ		『チロヌップの きつね』 高橋宏幸	『おこりじそう』 山口勇子	『お母さんの 結びな』 長崎源之助	『チロヌップの きつね』 高橋宏幸
四 年	『一つの花』 今西研行	『一つの花』 今西研行	『すいかの種』 沖井千代子	『一つの花』 今西研行	『一つの花』 今西研行	『一つの花』 今西研行
五 年		『春先のひょう』 杉みき子		『お母さんの木』 大川悦生	『お母さんの木』 大川悦生	『おはじき』 宮川ひろ
六 年	『石うすの歌』 壺井栄	『ヒロシマのうた』 今西研行	『山へ行く牛』 川村たかし	『川とノリオ』 いぬいともこ	『川とノリオ』 いぬいともこ	『川とノリオ』 いぬいともこ

平成4年度版

	光村図書	東京書籍	学校図書	日本書籍	教育出版	大阪書籍
一 年						
二 年				『えんぴつびな』 長崎源之助	『ふるさとの空 に帰った馬』 木暮正夫	『ごめんねムン』 おまこと
三 年	『ちいちゃんの かがおくり』 あまんきみこ		『チロヌップの きつね』 高橋宏幸	『おこりじそう』 山口勇子	『お母さんの 結びな』 長崎源之助	『ガラスの花よ めさん』 長崎源之助
四 年	『一つの花』 今西研行	『一つの花』 今西研行	『すいかの種』 沖井千代子	『一つの花』 今西研行	『一つの花』 今西研行	『一つの花』 今西研行
五 年		『春先のひょう』 杉みき子		『お母さんの木』 大川悦生	『お母さんの木』 大川悦生	『おはじき』 宮川ひろ

六 年	『石うすの歌』 壺井栄	『ヒロシマのうた』 今西祐行	『ロシアパン』 高橋正亮	『川とノリオ』 いぬいとみこ	『川とノリオ』 いぬいとみこ	『川とノリオ』 いぬいとみこ
--------	----------------	-------------------	-----------------	-------------------	-------------------	-------------------

平成 8 年度版

	光村図書	東京書籍	学校図書	日本書籍	教育出版	大阪書籍
一 年						
二 年				『えんぴつびな』 長崎源之助		『スズさんの すず』 小堀雄二
三 年	『ちいちゃんの かきおくり』 あまんきみこ		『子ロヌップの きつね』 高橋宏幸	『おこりじそう』 山口勇子	『お母さんの 紙びな』 長崎源之助	『ガラスの花よ めさん』 長崎源之助
四 年	『一つの花』 今西祐行	『一つの花』 今西祐行	『すいかの種』 沖井千代子	『一つの花』 今西祐行	『一つの花』 今西祐行	『一つの花』 今西祐行
五 年			『父ちゃんの紙』 長崎源之助	『お母さんの木』 大川悦生	『おはじきの木』 あまんきみこ	『手紙』 宮本輝
六 年	『石うすの歌』 壺井栄	『ヒロシマのうた』 今西祐行	『ロシアパン』 高橋正亮	『川とノリオ』 いぬいとみこ	『川とノリオ』 いぬいとみこ	『川とノリオ』 いぬいとみこ

平成 12 年度版

	光村図書	東京書籍	学校図書	日本書籍	教育出版	大阪書籍
一 年						
二 年				『えんぴつびな』 長崎源之助		
三 年	『ちいちゃんの かきおくり』 あまんきみこ			『おこりじそう』 山口勇子	『お母さんの紙 びな』 長崎源之助	『えんぴつびな』 長崎源之助

四 年	『一つの花』 今西祐行	『一つの花』 今西祐行	『すいかの種』 沖井千代子 『写真』 松原由季	『一つの花』 今西祐行	『一つの花』 今西祐行	『一つの花』 今西祐行
五 年		『最後の少女アンネ』 シュナーベル	『父ちゃんの服』 長崎源之助	『お母さんの木』 犬川悦生	『おはじきの木』 あまんきみこ	『手紙』 宮本輝
六 年	『石すの歌』 壺井栄	『ヒロシマのうた』 今西祐行	『ロシアパン』 高橋正亮	『川とノリオ』 いぬいとみこ	『川とノリオ』 いぬいとみこ	『川とノリオ』 いぬいとみこ

平成 14 年度版

	光村図書	東京書籍	学校図書	日本書籍	教育出版	大阪書籍
一 年						
二 年						
三 年	『ちいちゃんの かたおくり』 あまんきみこ			『ガラスの花よめ さん』 長崎源之助		『母さんの歌』 大野允子
四 年	『一つの花』 今西祐行	『世界一美しいほ くの村』 小林豊		『チイ兄ちゃん』 レン・ターリン	『一つの花』 今西祐行	『一つの花』 今西祐行
五 年			『父ちゃんの服』 長崎源之助	『かくれ家の生活— アンネの日記より—』 加藤祥子	『おはじきの木』 あまんきみこ	『手紙』 宮本輝
六 年		『ヒロシマのうた』 今西祐行	『ロシアパン』 高橋正亮	『川とノリオ』 いぬいとみこ	『川とノリオ』 いぬいとみこ	『川とノリオ』 いぬいとみこ

戦争文学教材が小学校国語科教科書に初めて採用されたのは、大阪書籍の昭和 31 年度版、5 年『最後の授業』（ドーデ作）である。この教材はそ

の後、学校図書、教育出版にも採用された。しかし、それ以降新たに採用される教材は長い間現れず、昭和 48 年度までの 17 年間は、この教材が唯一の戦争文学教材であった。ゆえに、昭和 48 年度版までの一覧表は省略した。

その後、昭和 49 年度版の学校図書、東京書籍、日本書籍の教科書に、初めてアジア・太平洋戦争を題材とした戦争文学教材が登場した。その中でも、注目すべきは日本書籍に採用された『一つの花』(今西祐行作)である。この教材は、現行でも採用されている非常に息の長い著名な教材である。平成 12 年度版では、6 社中 5 社が採用しているほどである。今まで、たった一つきりだった戦争文学教材が、昭和 49 年度版では急に採用され始めたのはいったいなぜなのだろうか。その理由の一つは、教科書検定制度の問題にあるのではないだろうか。昭和 45 年の、家永裁判における杉本判决である。この判決によって、「検定は、客観的に明らかな誤りがある場合や、その他の技術的事項に対してのみにとどめるべき」だとされた。これによって、民間の教科書会社の採択の幅が広がることになったのではなかろうか。

教科書会社別に見てみると、昭和 49 年度版から昭和 52 年度版にかけての教育出版の変化や、昭和 52 年度版から昭和 55 年度版にかけての日本書籍の変化が特に目を引く。昭和 49 年度版から採用され始めた戦争文学教材は、その後教科書会社によって多少のばらつきはあるものの、数を増やしていき、平成 12 年度版では、全教科書会社が 3 作品以上掲載するまでに至った。

しかし、現行の平成 14 年度版では、減少傾向が見られる。中でも学校図書は、平成 12 年度版では、第 4 学年で『すいかの種』と『写真』(『写真』は児童作品であるが)という 2 つもの戦争文学教材を掲載していたにもかかわらず、平成 14 年度版では第 4 学年での採用作品はなくなっている。他の教科書会社でも同じような変化が見られる。光村図書では 24 年間採用され続けた『石うすの歌』(壺井栄・作)が平成 14 年度版では消えている。しかも、代わりに新しい戦争文学教材が採用されているわけでもない。このような変化はいったい何を意味するのだろうか。

おそらく戦争文学教材は現場で必ずしも扱いやすい教材ではなくなってきたということではなかろうか。戦争文学教材には、指導する際、戦争を



知らない子ども達に、当時の時代背景をある程度理解させなくてはならないという難しさがある。また、徳目主義的な指導に陥りやすいという危険性も有している。さらには、教壇に立つ教師自体が、戦争を経験していない世代に転換してしまったため、どのように扱ったらよいのか分からない、自国が経験した戦争について自分自身があまり詳しく知らないという声が高まってきたということも考えられる。

### 3. 戦争文学における対比の構造

戦争文学教材の本当の価値とは、戦争は恐ろしいものである、生命は尊いものである、といった内容レベルにあるのではなく、普遍的な読みの技術を指導していくために戦争文学は有効であるということにあると筆者は考えている。

そこで本稿では、戦争文学の一般的な構成原理は「現在（平和）と過去（戦争）との対比」であるということに着目し、新しい学習指導の方法として、そのような観点で作品を読むことを提案する。

対比は、広辞苑によると、「二つの相対立する感覚や感情などが空間的あるいは時間的に相接して現れる時、その差異が強調され、あるいは際立つ現象。」とある。簡明に言えば、二つの違うものを比べることである。人は普段、物事の特徴を深く認識しようとする場合、無意識にそれを他のものと比べるという作業を行なっている。特に、対象とは反対の性質を持つものと比べることを通して、特徴や差異を認識するという方法を取っている。例えば、誰かが「長野県は寒い」という場合、その人は無意識のうちに、長野県の気温と、日本の比較的暖かい他の地域の気温とを比べている。このように、日常生活で人が何かを認識したり、特徴を掘んだりする際に取る思考の過程には、多くの場合、対比の構造が内在している。

しかし、日常生活に限らず、対比することを通して差異を認識する、特徴をつかむという行為は、学習者が文学教材に向かう際にも有効である。以前から、戦争文学教材以外の文学教材でも、対比の構造を捉える言語技術を指導する実践や、対比を通して人物の心情に迫るといった実践は行なわれている。しかし、戦争文学教材ほど、対比の構造に着目して読むのに適した文学教材はない。なぜなら、前述したように、戦争文学教材の場合、

作品固有の対比の構造の他に、いやおうなしに「戦争」と「平和」の対比の構造を有しているからである。「戦争」と「平和」。この2つを対比しながら作品を読むということは、戦争という過酷な状況の中での人間の姿、家族の絆等を描いた作品を読み深めるためには極めて効果的である。

#### 4. 現行の教科書教材に見る対比の構造

次に、対比の構造が実際に教材の中でどのように位置づけられるかを述べる。ここでは、光村図書の『ちいちゃんのかげおくり』を取り上げることにする。(ページ番号は平成14年度版光村図書のもの)

##### ・第1場面～第4場面⇔第5場面(場面の対比)

第1場面から第4場面までの時代は戦時中である。一方、第5場面だけは、時代が平和になった世の中になっている。これは、すなわち戦争と平和という「場面の対比」になっている。ちいちゃんが家族と離れ離れになっていき、死に向かっていく様子を、ちいちゃんに寄り添って読んできた学習者は、16ページ5行目の「夏のはじめのある朝、こうして、小さな女の子の命が、空に消えました。」という叙述で、一気に現実の世界に引き戻され、ちいちゃんの死を突きつけられることになる。そして、第5場面の、公園で無邪気に遊ぶ子ども達とちいちゃんを対比し、悲しみを深くするだろう。特に本文の中で取り上げたい表現は、第4場面16ページ3行目の「きらきら」と、第5場面16ページ11行目の「きらきら」との対比である。空の上で家族と再会できたちいちゃんの「きらきら」した笑顔の悲しさと、平和な世の中で遊ぶ子どもたちの「きらきら」した笑い声とを対比することによって、戦争の持つ非人間性がより明確に捉えられる。また、ちいちゃんと、無邪気に遊ぶ子ども達という対比構造で捉えれば、「人物の対比」にもなっている。

##### ・第4場面の話者⇔第5場面の話者(視点の対比)

第4場面では、話者の目は、ちいちゃんの視点に完全に重なっている。つまり、三人称限定視点になっている。それは、13ページ8行目の「明るい光が顔に当たって、目がさめました。」13ページ10行目の「ひとくのだ

がかわいています。」のように、主語が省略されている文が多用されていることからわかる。一方、第5場面では、話者は三人称客観視点で、戦争が終わり、平和が訪れた後の場面を淡々と語っている。これは「視点の対比」になっている。

・戦争の持つ非人間性⇔ちいちゃんの願い（物質と精神の対比）

戦争は、ちいちゃんから様々なものを奪ってしまった。お父さん、かけおくりという遊び、お母さん、お兄ちゃん、家、そしてついにはちいちゃんの命までも奪ってしまった。しかし、ちいちゃんは一人ぼっちになっても最後まで家族に会いたいという気持ちを強く持ち続けている。全てを奪いつくす戦争でさえも、家族を思う気持ちだけは奪うことができなかったのである。戦争は物質的なものは、全てを破壊することができるが、たった一人の少女が家族に会いたい願う気持ち（精神）を破壊することはできなかったということから、ここでは「物質と精神の対比」とした。

・第1場面「青い空」⇔第2場面「赤い火」「ほのおのうず」「血」

・第3場面「暗いぼう空ごう」⇔第4場面「明るい光」「空の色」  
（色彩の対比）

第1場面では、「青い空」というように、直接的に青い色を表す色彩語が見られる。しかし、第2場面では「赤い火」や「ほのおのうず」や「血」など、赤い色を表す色彩語が多く見られる。この「青」と「赤」の色彩語が効果的に対比されていることによって、第1場面から第2場面へと進むにつれて戦火が激しくなっていく様子が示されている。

また、第3場面では、「暗いぼう空ごう」という暗色をイメージさせる色彩語が見られる。ぼう空ごうは、死へと向かうちいちゃんが一人ぼっちで過ごす、現実世界の最後の場所である。小さな少女が、暗闇に一人きりであることの恐ろしさ、悲しさを学習者に想像させる。一方、第4場面では、「明るい光」「空色」などの明色をイメージさせる色彩語が用いられている。空の上の声に誘われてかけおくりをするということは、実際には死へと近づいているということを意味するのだが、家族に会いたいというちいちゃんの願いがかなう場面なので、明るい色彩語が使われているのだろう。しかし、天国でしか再会できないという悲しい幸せであるということも、こ

の第4場面の「色彩の対比」を通して理解させたい。

・第1場面のかげおくり⇔第4場面のかげおくり（象徴の対比）

前述したように、本教材では、かげおくりが非常に重要な意味を持っている。ちいちゃんにとって、かげおくりは家族との楽しい思い出でもあり、離れ離れになってしまった家族と自分を繋ぐたった一つの絆でもあったのである。このように読んでくると、かげおくりはちいちゃんにとって、「平和」や「家族」の象徴だったことが分かる。第1場面と第4場面、どちらもちいちゃんが家族と一緒にかげおくりをしている場面である。しかし、この二つのかげおくりには大きな違いがある。この2つは、家族との最後の記念写真という意味を持つ現実のかけおくりと、家族からの呼び声に誘われて、ちいちゃんが死へと向かう幻想のかげおくりという「象徴の対比」の構造になっている。第1場面と第2場面における具体的な叙述を比較してみると次のようになる。

「青い空を見上げたお父さんが、つぶやきました」4ページ9行目

「お父さんの声が、青い空からふってきました」14ページ2行目

「お母さんが横から言いました」5ページ13行目

「お母さんの声も、青い空からふってきました。14ページ4行目

「お父さんが数えだしました」6ページ9行目

「お父さんのひくい声が、重なって聞こえだしました」14ページ8行目

「お母さんの声も重なりました」6ページ11行目

「お母さんの高い声も、それに重なって聞こえだしました」14ページ10行目

「ちいちゃんとお兄ちゃんも、いっしょに数えだしました」6ページ13行目

「お兄ちゃんのわらいそうな声も、重なってきました」14ページ12行目

「白い四つのかげぼうしが、すうっと空に上がりました」7ページ2行目

「ちいちゃんが空を見上げると、青い空に、くっきりと白いかげが四つ」  
15 ページ 1 行目

・空の上のちいちゃん⇔現実の世界のちいちゃん（人物の対比）

「わらいながら、花畑の中を走りだしました」16 ページ 3 行目

「こうして、小さな女の子の命が、空に消えました」16 ページ 5 行目

第4場面で幻のかげおくりをして、空に昇っていったちいちゃんは、空の上で家族と再会し、笑いながら花畑の中を走り出す。一人ぼっちで寂しかったちいちゃんが、家族とやっと会えたことを無邪気に喜び駆け出す「動」のイメージの描写である。しかし、その直後の叙述で、現実の世界ではちいちゃんの命が失われたことが暗示されている。ここでは「静」のイメージが描かれており、もう動かなくなったちいちゃんの様子が読み取れる。この二つは、空の上のちいちゃんと、現実世界のちいちゃんという「人物の対比」になっており、死という形でしか家族との幸せを得ることができなかったこの少女のあわれさを浮き彫りにしている。

## 5. 終わりに

本稿では、戦争文学教材の学習指導が内容理解、特に心情理解に偏りがちであったことを指摘し、読みの技術に着目した新しい学習指導の一つとして、対比に着目して読むという方法を提案した。また、実際の教材における対比の構造を作品固有の対比の構造とともに分析した。しかし、それをどのように授業に組み込んでいくのかというところまでは言及できなかった。そこで、今後は現場の実際の授業で試行錯誤しながら取り組み、研究を進めていかななくてはならない。そのためには、低学年のうちから複数の教材で反復して読む練習をしていくことが必要である。

### 【参考・引用文献】

- ・井関義久『入門「分析批評」の授業』1989 明治図書
- ・大平浩哉『世紀末国語教育論』1995 有朋堂
- ・鶴田清司『国語の基礎学力を育てる－学力保障・言語技術・絶対評価－』2003

明治図書

- ・鶴田清司『国語教材研究の革新1「ごんぎつね」の〈解釈〉と〈分析〉』1993  
明治図書
- ・鶴田清司『文学教材の読解主義を超える』1999 明治図書
- ・新村出編『広辞苑第五版』1998 岩波書店
- ・日本文学教育連盟『小学校国語科文学教材辞典』1972 鳩の森書房
- ・野澤正美『「ちいちゃんのかげおくり」の授業』2003 明治図書
- ・長谷川潮『「戦争と平和」子ども文学館別巻』1995 日本図書センター
- ・浜上薫『「分析批評」「10」のものさし』1990 明治図書
- ・藤井圀彦『分析批評の授業入門』1986 明治図書
- ・『1997No548 教育科学国語教育臨時増刊「分析批評」で国語授業を知的にする』  
明治図書
- ・『1997No172 実践国語研究別冊「ちいちゃんのかげおくり」「まぼろしの町」』明  
治図書

(ふくだ しょうた 長野市立古里小学校)